



饒村先生と新聞部と私 ※

饒村先生がお亡くなりになった（平成21年3月28日）という知らせを受けたのは、糸魚川の宿だった。教えてくれたのは、新聞部で1級上だった清水信義さんである。彼は三代目の編集長だった。私の高校生活はおおむね新聞部の部室暮らしだったから、先生と言えば饒村先生である。

と言っても、先生の授業はおおむね山登りの脱線話を拝聴するに止め、関わりを持たせていただいたのは、もっぱら新聞に掲載する記事を巡ってであった。このことについて、昔支部会報に書いたことがある。

何しろ小和田校長の「1に勉強、2に勉強、3・4がなくて5に勉強」の時代である。くちばしの黄色い評論家集団は、先生方と衝突することも多かったから、顧問の苦労は絶えなかった。当時の記事で多用されている「…ではなかろうか」という表現は、おおむね饒村先生苦渋の修正である。

先生が俳人として一家を成されたことは、卒業してずいぶん後に知った。



句集『雪無尽』発刊時の先生

雪国を捨てず雪解けあるかぎり 楓石
は、雪国に生きる先生の心意気を感じさせる名句だが、早々に雪国を捨ててしまった私には、心に矢を打ち込まれた一句でもあった。

その先生が一昨年6月ナナ子夫人に先立たれて多摩の施設に移られた転居通知の

雪国を捨てぬ雪どけ待ちきれず
つばくらは生まれし雁木忘れずに 楓石
の2句に、私は別れの日の近いことを予感したのだった。

杉臣 武（高6回）

鎮西 ^{ひさし} 昶 君を悼む ※

胃ガンでも進行性で、発見が難しいと言われている一番質の悪いスキルス性胃ガンと診断されたのは一昨年始めのことでした。そして1年半の闘病の末、昨年10月11日に遠い世界に旅立ちました。

彼は僧侶です。親鸞聖人を信奉し、宗教心がつり、41歳の時サラリーマンから僧侶になりました。10月14日に密葬。10月30日、青山葬儀場で本葬。500人を超える友人、先輩、後輩、信徒さんに見守られて旅立ちました。彼の人の、交流の広さと地道な宗教活動が、このように多くの参列を頂いたのでしょう。

彼は何時もグループの中心にいました。そして何時も私達の話し相手になってくれました。中学、高校の同期生の会をまとめ、また30年以上に亘って校友会東京支部の世話役として、総会の手助けと司会の労を何度も務めてくれました。

椿毅陸元副支部長、野口春雄元幹事長を



はじめ多くの校友の葬儀を取り計らい、心にしみわたる、あの読経の声と講話で参列の人々に感銘と慰めを与えてくれました。また身寄りのない方のお弔いにも積極的に勤め、民生委員としての活躍も喜ばれておりました。

念仏道場を造営し、仏の世界を説くのが夢でした。

生死についての悟りは凡人の私達より幾倍かと思いますが、69才の若さで、道場の夢途中で、若い子供達の行く末を見ることがなく旅立たなければならぬと知った時の気持ちを察すると切なくなります。合掌

岡村博己 (高10回)

その他32号以降連絡のあった方々

中41回 竹内英夫 21. 5. 5
 中48回 吉川幹夫 20. 12. 30
 中52回 坂島芳夫 21. 3. 24
 中52回 上沢準一 21. 9.
 中56回 藤本秀夫 21. 2. 11
 高2回 和田茂
 高4回 梅川哲太郎 20. 12. 15
 高5回 小泉祐康 21. 6. 4

高5回 近藤功 21. 4. 7
 高6回 飯田昌夫 21. 8. 12
 高7回 藤田和夫
 高10回 片桐勝利 21. 4. 6
 高11回 丸山昌紀 20. 5. 28
 高14回 長谷川健 19. 7. 31
 高16回 川瀬誠 21. 7. 31
 高23回 佐藤新治 20. 8. 23

(敬称略)

謹んでご冥福をお祈りいたします